Tottori University Hospital Center for Clinical Residency Program.

鳥取大学医学部附属病院

研修センターだより

2021.3
38

鳥取大学医学部附属病院卒後初期臨床研修における研修理念

将来、社会が求める最適な医療を、安全に配慮して提供できる優れた医療人となるために、

1．医師としての基本的価値観（社会的使命、利他的態度、思いやり、自己向上心）を身につける。
2．医学や医療に関する倫理原則を理解し行動する。
3．日常診療で頻繁に遭遇する病態・疾患に対応できる基本的な診療能力を身につける。
4．常に最新の医学知識の獲得に努めるとともに、科学的探究心を持ち、地域社会や国際社会、公衆衛生への貢献をめざす。
5．他の医師や医療者と共に医療を行い、学び、互いに敬意をはらう姿勢を身につける。

第 14 回鳥大 JMECC を開催しました

１１月３日（祝）、第 14 回目となる鳥大 JMECC が当センター専門教育研修部門の主催で開催されました。

JMECC は日本内科学会認定の救急講習会で、ICLS 講習会の内容と内科の様々な救急疾患への対応を反復練習し、１度の受講で ICLS と JMECC の受講認定が受けられます。

近年は年２回開催として続けてきましたが、今年は春の回が感染予防の観点から見送りとなり、今年度１回目の開催となったことから、１年目鳥大で研修を開始した研修医と２年目で未受講となっていた研修医が受講しました。

毎年と違う点は、研修開始から半年が経ち、宿日直で経験を積み、既に救急科研修をしている人もいる１年目研修医たちに「おどおど」した感じがなかったことでしょうか。理解度も高いのでプログラム進行に遅れもなく、ちょっとびっくりするくらいでした。

また、ディレクターやインストラクターなど指導者も全て院内の内科系診療科の医師や看護師の方々がご担当くださいました。１病院でスタッフ全てを賄える病院もなかなか無いと聞いていたので、続けて開催してきたことが指導側の層の厚さにもつながっている、と改めて感じた第 14 回鳥大 JMECC でした。

令和２年度マッチング結果について

今年度のマッチングと二次募集における採用予定者について報告します。

	募集定員	マッチング最終公表	二次募集による採用	２月末時点の４月採用予定者
医科	４４名（８プログラム）	１３名	６名	１９名
歯科	５名（１プログラム）	４名	１名	５名
合計	４９名（９プログラム）	１７名	７名	２４名

コロナ禍で鳥大の医学生は院外実習が一部中止となり、例年のように「実習で行ってみて雰囲気を知る」ことが難しい状況にありました。今年度の医科のマッチングでは臨床実習の受入れやWEBも含めた病院見学会があった病院とまたは学生が参加できなかったり、中止だったりした病院とで鳥大生のマッチ数に差が出ており、影響があったように感じています。

また、本院は研修医採用試験に WEB 面接を導入する、と春に公表しており、医科歯科合わせて全体の 23%程度が WEB での受験となりました。

歯科のプログラム募集定員は令和２年３月の歯科医師研修管理委員会での審議を経て５名で固定となりました。

医科、歯科共に例年になく二次募集に対する応募者が多く、年を越しても採用試験を実施しました。新年度は多彩で多様な研修医が集まって下さるものと思い、とても楽しみにしています。

令和２年度 鳥取県臨床研修セミナー報告

新型コロナウイルス感染症
～鳥取県での状況をふまえて～

令和３年１月２９日（金）鳥取大学医学部附属病院で、今年度の鳥取県臨床研修セミナーを開催し、講演の様子を基幹型病院にＷＥＢ配信しました。

感染症の専門家である、本学医学部臨床感染症学の千酌 浩樹教授を講師に迎え、昨年度からの話題である COVID-19 感染症についてお話しいただきました。鳥大会場他、各病院への配信で研修医 65 名、指導医・上級医 8 名が参加しました。

研修医今昔物語 ～私の研修医時代、そして今～

臨床検査医学 血液内科　河村　浩二

私は 2007 年（平成 19 年）に鳥取大学を卒業し、京都第二赤十字病院で初期臨床研修を受けました。2004 年から初期臨床研修制度が義務化され、当時は（今も？）大学病院以外で研修する人が多かった印象があります。私は元来自由人で、住む場所にもこだわりがないため、マッチングで病院を選ぶ際、一度京都で暮らしてみたいという理由だけで研修先を選んでしまいました。研修医時代を思い返してみても、特に辛かった記憶はありません。恥ずかしながら、それほど真剣に研修していなかったからかもしれません。ですので、各科のローテートの内容も、あまり記憶がありません。内科認定医をとるために自分の書いた入院サマリーをみて、あまりの内容のなさにびっくりした記憶があります。ただ、担当患者さんにだけは土日も関係なく会いにいくようにはしていましたので、当時の患者さんの記憶だけはあります。同期は 15 人ほどいましたが、出身大学も割とばらばらでした。ほぼ毎日仕事が終わったら友人たちとご飯を食べに行ったり、飲みにいったりしていました。したがって、研修医時代は楽しかった記憶しかありません。その当時から血液内科を一応は志望していましたが、特別に興味を持って研修したということはなく、今思うと医師としてはもったいない 2 年間でした。

3 年目から母校の鳥取大学に戻りましたが、5 年目から今度は関東の病院へ勉強に行き、2020 年の 4 月にようやく鳥取大学に戻ってきました。初期研修後からは、心を入れ替えて臨床や研究をマイペースながらも頑張ってきました。

現在、コロナ禍で頻回に飲食はできないと思いますが、研修医の先生方は同期との親睦を深め、私はできませんでしたがぜひ何かしら形になる仕事（学会発表等）をしてほしいと思います。また、もうすぐ初期研修医が終わる先生方で、私のようにポリクリの延長のような研修をしてしまった方も、やる気になればいつからでも人は変われますので、ぜひ頑張ってください。

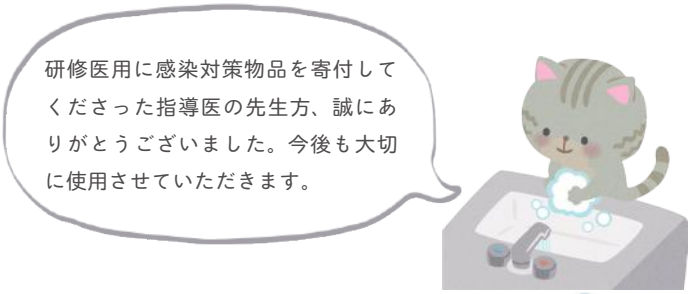
新型コロナウイルス感染症流行への対応について

令和２年度は新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）一色となりましたが、当センターにおいても、幾度もコロナ対応に追われました。

令和２年４月の「第１波」においては、一時的に県外病院への研修医の出向および県外からの研修医受け入れをすべて中止する措置をとらせていただきました。また、コロナ専用病棟の新設に伴い精神科病棟への入院が全面中止となった際には、一時的に精神科研修はすべて院外の関連病院で行う方針とさせていただきました。等々挙げればきりがありませんが、いずれも現在は通常通りの運営が可能となっています。対面イベントについては今後も制限が必要であり、しばらくはＷｅｂ開催等での対応を行っていく予定です。

今年度は色々な制限がありましたが、当院の研修医は日々研鑽を積んでおります。当院において研修医がコロナ入院患者を診察することはありませんが、今回得た知識が今後役に立つことは間違いなく、この経験を成長の糧にしてほしいと思います。

（矢田貝 菜津子）



令和２年度鳥取大学医学部附属病院

卒後初期臨床研修修了式

令和３年３月25日（木）卒後初期臨床研修修了式を執り行いました。山本副病院長より研修医の先生方へ研修修了証が手渡されました。山本副病院長、前垣センター長から祝福と激励を受け卒後臨床研修センターを巣立っていきました。

また、修了式終了後には、令和２年度ベストレジデント３名（中村太紀研修医、野内直子研修医、吉川侑希研修医　※五十音順）及び優秀指導医８名（生越智文先生、加藤亜結美先生、高野周一先生、花木武彦先生、舟木佳弘先生、三好秀直先生、矢内正晶先生、山本章裕先生、若原誠先生　※五十音順）の授賞式と記念品の贈呈が併せて行われました。

この２年間の研修は、未曽有の災禍で研修変更を余儀なくされた部分もあったり、進路を決める為の見学、息抜きのお出かけもできず大変な思いをされ、考えていたような研修とならなかった面も多々あったと思います。２年間懸命に研修を頑張った研修医の先生方の初期研修修了という新しい門出を無事祝うことができ、大変嬉しく思います。４月からは当院で後期研修を行う方、市中病院で診療される方とそれぞれの道へ進みますが、鳥取大学の研修で結ばれた縁が、これからもつながっていけば幸いです。

見送る１年目研修医の先生方、来年度も大変な環境下での研修になると思いますが、できる限りサポートしますので、頑張っていきましょう。

研修医をご指導いただいた先生、関係部署の方々、誠にありがとうございました。今後とも卒後臨床研修センターをよろしくお願い申し上げます。

ベストレジデント賞

写真左から
吉川　侑希　研修医
中村　太紀　研修医
野内　直子　研修医

優秀指導医賞

授賞式当日にご出席いただいた先生方です。
写真左から
高野　周一　先生、花木　武彦　先生
矢内　正晶　先生、三好　秀直　先生

今回の研修医日誌はベストレジデント賞を受賞した３名の研修医です。

研修医日誌

医科研修医２年目　吉川　侑希

研修医２年目の吉川侑希と申します。初期研修生活が終盤に差し掛かり、いよいよ後期研修が始まる期待と、その責任感への不安や焦りでいっぱいの日々を過ごしております。

私は学生時代から鳥取大学心臓血管外科への入局を決めていたため、今後の進路のため鳥取大学最先端外科専門プログラムを専攻しました。研修中は、鳥取大学で 13 ヶ月、鳥取県立中央病院で９ヶ月、安来市立病院で１ヶ月、西伯病院で １ヶ月研修させていただきました。様々な環境での医療を経験することができ、非常に充実した研修生活を送ることができました。教科書での知識はあっても実際の現場でどのように実施されているかを知らなかった事柄が多くあり、“百聞は一見に如かず” を実感する毎日でありました。

専攻科が決まっており、手術の現場にいることが好きである自分にとって、外科プログラムは研修生活の早い段階からより多くの外科系診療科での研修を行うことが可能で、外科医への道を進んでいることを実感できたため非常に良い選択であったと感じています。進路が決まっていると指導医の先生からのご指導も各科の一般的な内容に加えて、心臓血管外科医として把握しておくべき内容などもご教授いただくことができました。

充実した研修生活を送れた背景には、卒後臨床研修センターを始めとし、各診療科や病院スタッフの皆様方、関わっていただいた方々のお力添えあってのことと感じております。今後も研鑽を積み、診療に臨んでまいります。末筆ながら、お世話になった皆様方に御礼申し上げます。

医科研修医２年目　中村　太紀

私は山陰たすきがけプログラムを選択し、１ 年目は松江市立病院、２ 年目は鳥取大学医学部附属病院で研修をさせていただきました。２ 年目は日野病院（地域医療）、西伯病院（精神科）でもお世話になりました。この２年間を振り返ってみると日々忙しくはありましたが毎日が非常に充実しており、各診療科の先生をはじめとしてコメディカルスタッフの方や事務の方などたくさんの素晴らしい出会いがありました。

松江市立病院は二次救急病院ということもあり、救急外来では軽症から重症まで幅広く多くの患者さんを診させていただきました。はじめのうちは出来ることが少なかったのですが、たくさん経験を積ませていただく中で自分がレベルアップしているということを日々実感しながら研修を行うことができました。医師になりたての自分を一から指導してくださった諸先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

大学病院に戻ってからはカンファレンスでのプレゼンテーションに向けて勉強したり、抄読会に向けて準備をしたりと机に向かっている時間も増えて違った意味での忙し

医科研修医２年目　野内　直子

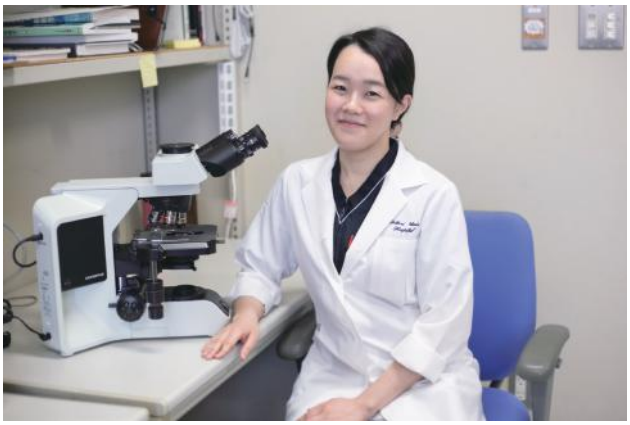
研修医２年目の野内直子と申します。私は鳥取大学医学部附属病院の山陰たすきがけプログラムで、鳥取大学医学部附属病院と鳥取赤十字病院で１年間ずつ研修を行いました。大学生の頃から病理医になろうと考えていた私は、初期研修の間しか患者さんを直接診る機会がないことから、大学病院と市中病院の両方で研修したいと思い、このプログラムに応募しました。

１年目の研修は鳥取赤十字病院で行いました。大学を卒業したてで右も左も分からなかった私を、諸先生方をはじめ病院内の多くのスタッフの方々に手取り足取りご指導を頂きなんとか１年間を走り切ることができました。また、多くの患者さんを担当させて頂き、患者さんからも多くのことを学ばせて頂きました。その中でも特に印象に残っている方がおられます。その方は入院が長くなり日々の検査について不安を感じられ、検査についてたくさん質問をされ、それに対して私は検査ごとに必要性や結果について説明させて頂きました。その時はとても大変だと感じていましたが、今振り返ると多くのことを勉強させて頂いた日々だったと感じています。

２年目の研修は鳥取大学医学部附属病院で行いました。約半年間は、１年目の研修及び３年目以降を踏まえて、個人的に学びたいと思った診療科で研修させて頂きました。

各診療科の先生方には、その診療科から見た臨床像と病理の対比などについて熱心にご指導頂きました。また、大学ではカンファレンスが多く開催されており、様々なアプローチの仕方や多角的な視点の大切さを学びました。２年目の研修中は１年目と異なり同期が多くいたため、日常のちょっとした疑問を気軽に質問することが出来ました。研修医ルームに帰ると誰かに会え、励まし合うことが出来、たくさんの刺激を貰いました。初期研修の２年間をこのプログラム、同期で過ごせて本当に良かったと思っています。

最後になりましたが、この２年間に関わって頂いた方々に感謝の気持ちを申し上げます。充実した２年間を終えることが出来たのは皆様のおかげです。これからも日々精進し、１歩でも昨日の自分より先に進めるよう精進してまいります。



さがありましたが、発表の仕方やエビデンスの活用方法なども含めてしっかりと指導していただいて非常に勉強になりました。救急科の研修では松江市立病院ではあまり経験できなかった最重症患者さんの初期対応を学び、ICU 管理も経験できました。市中病院とは異なり先生方の数も多く様々な考え方を学ばせていただいて勉強になりました。

このように１年目と２年目で特性の異なる病院を選択して研修を行ったことで、幅広いスキルが身についたように感じます。経験できる症例数の多寡を理由に都会の研修病院を選択する同期も多くいましたが、彼らに負けないくらい充実した研修ができたと自信を持って言えます。

４月からは鳥取大学医学部 整形外科に入局します。この２年間で学んだことを基礎として日々研鑽を行い、山陰の医療に貢献していきたいです。いずれは諸先生方が自分に指導してくださったように、後輩の指導にも積極的にあたりたいと考えています。

鳥取大学の研修プログラムは柔軟性が高く、非常に有意義な２年間を過ごすことができました。お世話になった方々にはこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

活躍！
先輩ドクター
第１回

鳥大プログラムで研修した先生方のその後のご活躍、皆さんも知りたくないですか？そんな先輩ドクターにスポットをあてた新コーナーが始まりました。現在当院で活躍中の先輩ドクター３名にご執筆いただきました！

脳神経内科　佐桑　真悠子　医師

こんにちは。脳神経内科の佐桑と申します。私は 2011 年鳥取大学を卒業し、鳥取赤十字病院および鳥大病院での初期研修を経て、脳神経内科へ入局しました。診療科については大いに迷いましたが、一人の患者さんを丁寧に診察し長期間向き合っていく診療に魅力を感じたことが決め手となりました。

医師 3 年目は大学で臨床に励み、4 年目から約 5 年間は松江赤十字病院へ赴任しました。松江の環境はよく肌に馴染みまして、連日病院近くの居酒屋の誘惑に負けたり、マラソンや登山に励んだりと毎日が充実し、当初の予定よりも長めに居座りました。松江水郷祭の花火は素晴らしいものでして、年々場所取りのコツを掴んでいきましたが、やはり米子に思いを馳せる日々でもあり、とうとう医師 9 年目に大学に戻ることとなりました。

現在は節目の 10 年目、臨床医 + 社会人大学院生として主に認知症・神経変性疾患患者さんの診療と神経病理の臨床・研究に励んでおります。病理の仕事としましては、主に剖検脳や生検筋･末梢神経などを観察し診断していくわけですが、老人斑･神経原線維変化･レビー小体･Bunina 小体などといった特有の異常構造物を見つけては関心し、綺麗に染色できたり教科書のような写真が撮れたときには満足感に浸ります。写真を見せられ自慢され困ってしまった研修医の先生もいらっしゃるかもしれません。

現在でこそこんな生活ですが、実は学部学生時代はそわそわと落ち着きがなく長時間の安静座位保持が苦痛で、顕微鏡を落ち着いて見ることが苦手でした。そんな私がなぜ神経病理を専攻することになったのかと申しますと、これまでの臨床経験によって病理の重要性に気づかされたことが大きな理由です。特に神経疾患は臨床診断が難しい場合が多々あり、確定診断には病理診断が不可欠です。神経難病や認知症の病態解明にとって神経病理の占める役割は今後も大きいと考え、まだまだ端くれながらも神経病理の分野に携われることにとても喜びを感じています。

第一外科　宮谷　幸造　医師

私の名前は「幸造」といいます。父親が「幸せを造る人間になって欲しい」という願いを込めて名付けてくれましたが、その名前に耐えうる人間か、今の自分を甘めに採点してみましても、60 点以下で落第です。さて、この度の『活躍！先輩ドクター』という新連載の題名は『活躍！』という部分が、同様に甘めの採点でも 60 点以下で落第ですが、鳥取大学の卒後臨床研修センターに育てていただいた『先輩ドクター』ではありますので、甚だ僭越ながら筆を執らせていただきます。

私の研修医生活は、1 年目は鳥取大学で、2 年目は鳥取県立中央病院で、たすき掛け研修でした。大学と外病院の両方を研修して感じたのは、『プレゼンテーション力がより養われるのは大学での研修ではないか』という点です。1 年目に、総回診やカンファレンスで、滝のような手汗をかきながら大勢の助教・講師・教授先生方の前でプレゼンして、突っ込まれてさらに滝のような脇汗もかいた経験は、大変貴重な経験になりました。現在の私の妻は、2 年目研修中に声

精神科　西口 毅　医師

研修医の先生方、精神科の西口といいます。これが掲載されている頃には卒後 8 年目、精神科６年目の医師として当院に勤務していると思います。この度、研修センターよりお声がけ頂きましたので、『活躍！先輩ドクター』の一例として執筆させて頂きます。

僕は平成 26 年に兵庫医科大学を卒業後、初期臨床研修を皆さんと同じく当院卒後臨床研修センターで研修させてもらいました。特に鳥取に縁があるわけでもありませんでしたが、学生時から精神科に進もうと考えており、当院の初期研修プログラムに精神科プログラムというのがあったのをきっかけに病院見学させて頂いたのが始まりでした。当院の初期研修精神科プログラムは、他のプログラムでも選択次第で可能ではありますが、初期研修中の精神科研修期間を長くとれることや、希望があれば他の精神科関連病院での研修も可能なプログラムだったように思います。僕の場合は当院の精神科で長く研修させていただき、初期研修修了後はそのまま当院の精神科に入局し後期研修に移りました。

精神科では３年間以上の精神科医としての診療経験が精神保健指定医や精神科専門医の取得には必要となるため、一般的には後期研修の３年間はこれらの取得を目指すことに焦点があてられることが多いです。僕の希望もそれに沿うものでした。僕の場合は１年目は当院、2 年目は松江市立病院、３年目は当院に戻っての勤務で、総合病院での幅広い精神疾患を診療することができました。早ければ良いわけでもないですが、当院精神科の専門研修指導体制のおかげで、いわゆる最短での指定医、専門医の取得ができました。

精神科疾患は未だ病態が解明されていないことも多く研究を行う領域としても精神科は魅力的に思います。精神科に進もうと考えたのも、研究が理由の一つにあったかもしれません。診療と並行して、僕の場合は専門研修を始めて２年目から大学院に入学しました。研究グループの勉強会に参加することや実験を手伝うことから始めていきました。現在は研究グループのテーマでもある神経炎症を中心に、動物実験によるストレスやうつ病をはじめとした精神疾患の病態解明についての研究を行っており、おそらくこの記事掲載時には大学院は卒業できているものと思います。今後も診療と研究に励んでいく所存です。

淡白な内容となりましたが、当院の卒後臨床研修センターで初期研修を行い当院の精神科に入局した医師の当時から現在までの一例を書かせて頂きました。これから研修や入局を検討される先生は新専門医制度となっていることやＣＯＶＩＤ-19 の影響で当院精神科病棟の規模が当時より縮小していることなど、様々な面で当時とは勝手や状況が違うとは思いますが、先生方の参考となれば幸いです。

をかけてゲットしましたが、大学での研修医生活で培ったプレゼンテーション力が発揮されたことは言うまでもありません（ストレートに気持ちを伝えたことが決め手であったと考えています）。

2021 年 4 月で卒後 13 年目となりますが、鳥取大学 消化器外科・小児外科の上部消化管（食道・胃）チームに所属しています。特に胃癌腹膜播種に対する腹腔内化学療法・高度肥満症に対する外科治療が私の担当で、いずれも山陰ではどの施設も行っていない治療なので、崇高な思いと意気込みで、取り組んでおります。研修等でローテートして一緒に働いて下されば、我々の仕事の楽しさがわかります。是非とも一緒に働きましょう！

最後になりましたが、医師かけ出しで右も左もわからない私を育てて下さり、この度は新コーナーの第１号に選んでいただきました鳥取大学 卒後臨床研修センター 先生・御担当者様方に感謝の意を表して、筆を置かせていただきます。今後とも御指導・御鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

医局の私の机です。PC のデスクトップ壁紙は家族写真で、広い机の真ん中に当科 藤原教授の似顔絵シールを貼って、見張られながら、もとい、見守られながら仕事をしています。

医局探訪 ～腎臓内科～

高田　知朗

こんにちは、腎臓内科です。腎臓内科が診療にあたる分野は、研修医の先生ととても関わりが深いですが、なにか分かりますか？研修医の先生（上級の先生も含め）必須の知識の一つである体液（輸液）管理です。腎臓は水分や電解質を調節する臓器であり、輸液の知識はこれから先生がどの道に進む上でも共通して必要となります。さらに、病院を受診する患者さんの多くは高齢者で、加齢性腎硬化症をはじめとして CKD を合併している方がほとんどです。CKD について学んでおくことは、今後の診療にかならず生きてくると思います。

腎臓内科が中心となって診療にあたる分野は、上述のような CKD や電解質異常などに加えて、糸球体腎炎や尿細管間質腎炎などがあります。CKD や電解質異常など、身体所見や血液、尿検査から“腎臓を通して全身を診る”診断学としての側面ももっている一方で、糸球体腎炎など腎病理をもとにした“ビジュアル”での診断も行います。特に糸球体の蛍光抗体法は自分たちで実際に組織染色を行って診断につなげています。

また、私たちは臨床研究として腎臓や尿を蛍光で光らせることで診断に繋げる試みも行っています。ぜひ一緒に何か新しいことに挑戦してみませんか？

私たちが診療する疾患のもう一つの中心は、透析を代表とする腎不全治療です。透析患者数は年々増加傾向ですが、鳥取県内では非専門医が透析を担当せざるを得ない施設も多いことから腎臓内科へのニーズが高く、私たちは地域診療においても重要な役割を担っています。鳥取大学医学部附属病院では、透析専門医の取得を目指した研修が行えます。また、腎臓専門医は内科系サブスペシャリティに認定されています。腎臓学会では毎年、初期研修医の先生を対象とした全国セミナーを開催していますが、私たちの中にはセミナーのチューター経験者も複数います。充実した研修のサポートができると思いますので、腎臓内科ローテーションをおすすめします。先生と一緒に仕事ができることを期待しています！

新連載

GOZZOでサシメシっ！ Vol.1

鳥大卒後臨床研修センター研修医が超ベテラン指導医と職員食堂「GOZZO」にてサシでご飯を食べながら対談する新企画がスタート！記念すべき第１回目は卒後臨床研修センター長の前垣義弘先生と、研修医１年目中林桃子先生のお二人です。この日のサシメシメニューは期間限定のバラエティランチ『ハンバーグ定食』でした。「かわいいごはんですね」と前垣先生。お二人とも美味しそうに召し上がっていらっしゃいました。

※食堂内では感染対策をし、食事時のみマスクを外して撮影しています。

◆研修医１年目を振り返って

前垣：１年目はどういう研修でしたか？

中林：循環器内科スタートで、そのあと鳥取生協病院で ４ か月間研修させていただきました。その後は戻ってきて産婦人科を ２ か月、今は救急を３か月研修中です。

前垣：生協病院はどうでした？

中林：Common disease が多く、大学とは全然雰囲気が違いました。内科を全般的に診ることができて、普通に風邪の患者さんとか、あまりこっちだと診られないので。

前垣:鳥取生協は、せいきょう子どもクリニックがあってそこに何年か行っていました。ほんとに市民の病院って感じで。

中林：そうですね。結構大きい病院のわりにはかかりつけにされている方が多い印象です。

前垣：これからの予定を教えてください。

中林：精神科や地域医療などの必修があります。あとは自分が将来進みたい領域に関連する診療科を研修したいと考えています。

◆山育ちの二人　海に魅せられて

- 後半は部活やスポーツの話題に。

中林：父がウインドサーフィンをしていて、その影響で自分もやっていました。習いに行ったりもしていて。若者には流行っていないのか、最近はあまり見かけないですね…地元（高知）に帰って、おじさんたちに紛れ込んでやっています（笑）

前垣：僕も研修医の時に、まあ当時はダイレクトに入局だったから、１ 年目は大学で ２ 年目は鳥取県中の小児科、３ 年目はぼくら脳神経小児科は今の鳥取医療センターに行くんだけど、結構時間に余裕があって。夏はボートとか船の免許を取ったりして。漁船なんか ４ トンくらいまで乗れるんです（笑）

中林：すごいですね！

前垣：ひと夏だったけど、ジェットスキーをやったりとか。更新するのを忘れていて、免許はもうなくなっちゃったけど（笑）

中林：ええ ?! そうなんですね。もったいないですね。

前垣：僕は生まれが兵庫県の北部で、山の中だから。海ってすごくいいですよね。

中林：私も海に面した県ではあるけど、実家は山間部なので。

前垣：高知もすごく広いもんね。まあぜひ、残りもいい研修をしてください。

中林：ありがとうございます。頑張ります。

令和３年度前期行事予定

４月　１日（木）	鳥取大学医学部附属病院医療系職員オリエンテーション（WEB）
４月　２日（金）	研修医プレローテーション開始
４月　３日（土）	第１５回鳥大 JMECC（医科１年目研修医）
４月　５日（月）	JMECC の振替休日（医科１年目研修医）
４月１２日（月）	研修科での研修開始予定（１年目研修医）
８月　３日（火）	令和４年度研修歯科医採用第１回試験
８月　５日（木）	令和４年度研修歯科医採用第２回試験
８月１０日（火）	令和４年度研修医採用第１回試験
８月１７日（火）	令和４年度研修歯科医採用第３回試験
８月１９日（木）	令和４年度研修歯科医採用第４回試験
９月１７日（金）	令和４年度研修医採用第２回試験
９月下旬	医科マッチング中間公表
９月２７日（月）	令和４年度研修医採用第３回試験

編集後記

皆さま最後まで読んでいただきありがとうございました。今回は新コーナー追加等のため、ページ数が多くなっております。楽しんでいただければ幸いです。令和 2 年度はコロナのためイベントが減ってしまいましたが、（掲載記事維持のためにも）来年度は少しでも増えるといいなと思う今日この頃です。なおこの研修センターだよりは当院で研修を修了した先生方にも配布しています。勤務先や住所が変更になった場合は下記の連絡先までご一報ください。（矢田貝 菜津子）

鳥取大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター

〒683-8504 鳥取県米子市西町 36-1

Tel：0859-38-7025　Fax：0859-38-6974

E-Mail jimsotsugo@ml.adm.tottori-u.ac.jp

http://sotsugo.med.tottori-u.ac.jp/

この紙面からの無断転載・複写・引用等を禁じます